

何を書かなかったのか

樋口ミュ

何を書いたのか、よりも何を書かなかったのかを見つけ出したい。どんな戯曲も作家の頭の中の氷山の一角だと思う。戯曲として見える文字は、仮にたったの5%だとして、書かれなかった見えない95%を「読み取れる」と私は考える。行間に、余白に、見える文字の向こう側に埋め込まれた作家の脳内の透明な言葉を発掘しながら読んでいく行為が、私にとって戯曲を読むことである。

最も発掘作業が楽しかったのは橋本健司さんだ。書いてある文字の向こう側に景色が見える、動く、匂いがする、色が変わる、「ああ、劇作家の言葉だなあ……」と、言葉を読む快感。けれど、最後の2ページまで読み進めた時に、途端に文字そのものしか読み取れなくなった。ワンダーな言葉から、説明とまとめの言葉は黒い文字。たった2ページ。このたった2ページが、とてもとても、悔しい。

OMS戯曲賞は上演を前提とした賞であり（今年は応募要項が変更になるだろう）だからこそ、上演を想像できる作品がある。植松厚太郎さんの戯曲は上演はスリリングだったのではないかと想像する。仕掛けは驚きであり、楽しさ。それはとても重要なこと。けれどその仕掛けは物語を飛躍させているか？ 縮こまらせてはいないか？ 仕掛けに頼らずとも、だんだんと変化する人間たちを描くことが出来るのではないかと感じた。どうしようもない登場人物たちが愛おしく思えたから。人間を真正面ではなく、観葉植物の隙間からちらりと横顔を覗き見する気分させてくれた。

棚瀬美幸さんの戯曲も上演作品だからこそ本番は力強いものだったのだろう。表現したいことはある。伝えたいこともある。そして上演に向けて照準を合わせて書いてしまえる技量があるがゆえに、最も大切なことを忘れてしまう。この作品を、自分のなかで、稽古場で、とことん突き詰めたのか。本番までを踏ん張るのではなく、突き詰めてから上演日を決定したって本当は遅くはない。

戯曲を読んで、なにか引っかかりを感じた時、なんどもなんども繰り返し読んでみると、戯曲の中に、私が理解するためのヒントが書かれていることに気がつく。中村ケンシさんの戯曲は切実だと私は読む。なのに登場人物の息づかいが聞こえない。なぜ？ ヒントは戯曲にあった。モチモチの木のリライト文のセリフ。もちろん作家本人はリライト文を書いているわけではない。けれど整理された言葉になっているのではないかと感じた。伝えたい強い強い思いが、補助やガイドになって登場人物たちの生命力の上に書き塗られているように思えた。しかし、整理せずそのままを文字にして書いていくことが彼にとってベストなことなのかどうかは、まだ私には見極められない。

戯曲は登場人物が語り、誰かと会話し、声として聞こえる言葉で作られる。日常の生き生きとした言葉がそのまま耳元で聞こえてきたのはキタモトマサヤさん。染み渡る土地の言葉。書き文字ではなく、話す声として心地よく届く。時代と土地の物語。だけど引っかかるのは、関西空港の問題がふわりと浮いていること。でもこの土地にとっては大切なこと。空港の問題をズシリと腹に落とすために何が必要だったのかと読み返す。ヒントは書かれている。共犯関係。「私」と「伯父さん」が話すだけでなく、具体的な行動を伴った共犯関係があり、それが空港の問題と繋がれば、もっと深い納得を得られたのではないだろうかと思う。

共感と共有が大事な時代だとよく耳にする。シェア。なるほど。けれどそれは今までの時代の話ではないかと私は密かに思っている。共感と共有は理解しているものの中で起こること。では、知り得ないことを知ると、なにが起こるのか。震えだ。自分の中にこんな部分があったのかと意識を拡大していくためには、共鳴するしかない。なぜ泣いているのか、なぜ笑っているのか、自分でも分からない。けれど震える何かが自分の中にある。それを「クマ」とした小栗一紅さんの朗読劇は最も激しく心を揺さぶられた。一番最初に読んだ時にはやっぱり打ちのめされた。それでも読む。作家は自分自身の「クマ」を描くのだとすれば、私はこの作品の中に小栗さんの「クマ」を探し損ねていたから。何度も何度も読み返す、と、これは小栗さんという人間を超えて、

大竹野正典さんという人間にたどり着き、さらにそれさえも超え、劇作とはなにか、集団創作とはなにか、ということ語った作品だと読むことができた。私はこの作品は戯曲だと思う。そう思える新しい感覚をこの本に共鳴することによって発見できた。だからありがとうと言いたい。

多くの人が共感できる物語として、横山拓也さんの戯曲は群を抜いている。求められているし、それに応えられる能力がとても高い。だから今のままで十分なのだと思えばそれで良いはずなのに、彼はもっと何かを掴みたいと思っている。私の憶測だけど。ならばと、思う。ならば、劇作家は寄り添うのではない。どこまでいっても劇作家は加害者であるという意識を忘れないでと思う。もちろんそれは彼だけに伝える言葉ではない。全ての劇作家に、そして自分自身に、自戒と希望のお守りのように心に持つ。それはもちろん受賞した山本正典さんにもピンク地底人3号さんにも同じように伝えるべき言葉であると思っている。

山本さんは宇宙をまるごと創る。死と生を隔てることのない宇宙を創る。魂が愛する者、愛する場所へと還っていく物語。見えないものを見ようとする尊さ。けれどちょっとだけ気になることは、見えないから見ようとする……では、見えすぎる世界では何が起こる？ 世界はどうひっくり返る？ もしかしたらさらに次元の違う展開をすることが出来たのではないかと思った。

さて、私なぞが心配しなくても、すでにピンク地底人3号さんは未来へむけて意識を進化させていた。授賞式が終わったあと「自分でも引かかかっていました。物語の誘惑に勝てませんでした。だから……遙が天寿を全うする話を書きました」と話してくれた。とっても大げさだけど、ピンクさんの言葉で、私は演劇全体に新しい思考回路が生まれたように感じた。彼の冷静で繊細に人間を観る眼差しが、多様な未来をきつと連れてきてくれるのだろうと思う。山本さんとピンクさんが並んで立っている。そして彼らにはともに創作する俳優たちがそばにいる。それが私はただただ嬉しかった。